

敬西房信瑞の研究

前島信也

本論では「敬西房信瑞の研究」と題して、法然の門弟である隆寛と信空を師にもつ敬西房信瑞（以下、信瑞とする）という人物について論じる。信瑞は生年不詳、弘安二年（一一七九）に没した人物であるが、その経歴についてはわずかに系譜史料に名前が見える程度であり、浄土宗史上ほとんど無名の人物であった。ところが、大正期に『広疑瑞決集』『明義進行集』が相次いで発見されたことにより、その著者である信瑞の名も一躍注目されるようになり、その系譜や事績に関する研究が開始されることとなった。信瑞の著作は、現在、『浄土三部経音義集』『泉涌寺不可棄法師伝』『広疑瑞決集』『明義進行集』『黒谷上人伝』の五本が知られている。

『浄土三部経音義集』は、日本で初めて「浄土三部経」に対して付された音義書であり、了惠道光『無量寿経抄』に先行する典籍である。これは音韻学・国語学の分野で、散逸文献を多数引用する点、特に室町期に散逸した菅原是善撰『東宮切韻』を多数引用する点に注目された。『泉涌寺不可棄法師伝』は入宋僧である俊仍律師の伝記であり、俊仍の事績を最も詳細に記述する文献である。『広疑瑞決集』は諏訪信仰にあつた上原敦広との浄土教・殺生に関する問答書であり、諏訪信仰との対論、本地垂迹が説示されることから、史学研究の立場からも注目された。『明義進行集』は、浄土宗に帰入した八人の人物の言行録であり、『和語灯録』『四十八卷伝』との関連性、また現存の伝記には見られない内容を含むことに注目された。そして『黒谷上人伝』とは、現存しないものの、『四十八卷伝』巻二六で北条時頼に献上したとされる法然の伝記である。

このように、信瑞の著作は典籍ごとにその主題や分野が大きく異なる点に特徴がある。これまでの研究では信瑞自身の経歴がほとんど分からないこともあいまって、各著作は個別の研究の中で部分的にピックアップされ、おのおの資料として利用されてきたに過ぎない。また、研究史上、比較的注目を集めた『明義進行集』を除けば、その他の典籍は基本的な研究の蓄積があるとは言い難い。

そこで本研究では、『浄土三部経音義集』および『広疑瑞決集』の基礎研究、すなわち書誌学的研究と引用典籍の精査を徹底的に行い、それを踏まえて信瑞の著作活動の意義を総体的に捉え直し、信瑞の人物像および教学的背景を明らかにすることを目的とした。本論は四篇で構成する。

第一篇では、『広疑瑞決集』『明義進行集』が大正期に発見されるまでの信瑞の伝承について整理を行った。そして、信瑞の後継者たる人物が絶えたこと、信瑞滅後に法語・伝記の集大成ともいえる『和語灯録』と『四十八卷伝』が作成されたことによつて、信瑞の伝承がそれらのなかに埋没してしまったことを指摘した。

第二篇では、『浄土三部経音義集』『広疑瑞決集』の書誌学的整理を行った。『浄土三部経音義集』の現存諸本五本を収集・調査し、その相互の関係について検討した。その結果、原書に近いものは東京大学国語学研究室所蔵本であると推定したが、諸本によつて異同が大きく、本文研究においては全系統本

を踏まえて検討する必要があることを指摘した。

『広疑瑞決集』についても同様に諸本を収集・調査し、相互の関係について検討した。その結果、残欠本ではあるものの、知恩寺所蔵本の書写年代が二三〇〇年前後にまで遡ることができ、最も書誌学的信頼性が高いことが判明した。また、唯一の完本であった伝来不明の大正大学附属図書館所蔵青焼本との本文比較によつて、大きく相違する箇所が無いこと、青焼本も一定の書誌学的信頼性を有することを結論づけた。

第三篇では信瑞の教学的背景として、『浄土三部経音義集』と『広疑瑞決集』の序跋文と引用典籍の検討を行った。第一章では、『浄土三部経音義集』の序跋文が高い作文技術によつて作成される点、本文中に思溪版大蔵経や宋代成立文献を多く引用する点を明らかにした。そして宋代文献の積極的受容からそもそも泉涌寺との関係が深かった点、高い作文技術を有している点から、俊苧の伝記編纂を要請されたことを推定した。第二章では『広疑瑞決集』が積極的に説話文学を例証として引用することを指摘した。特に『占事談』『続古事談』については現行のものよりも古い形式を有する可能性を指摘した。また、引用のスタンスとして、仏典と中国典籍、日本の説話を併せて引用することで、インド・中国・日本の三国間で共通の因果関係を提示することを明らかにした。

第四篇では『広疑瑞決集』の思想について、諏訪信仰をめぐる思想と浄土教思想の二点から検討した。前者は諏訪信仰が殺生を伴う贄によつて祭祀する信仰であり、信瑞は仏教的立場からその殺生行為を否定し、本地垂迹説や治世論によつて、神道・仏教・儒教の思想が一致することを提示し、それによつて祭祀構造の転換を要請したことを明らかにした。一方、浄土教思想については、複数の思想を提示しながらも、明確に法然を顕彰する立場を有しており、三心具足の称名念仏の相統を主張することを明らかにした。

結論では以上の点をふまえ、謎に包まれていた信瑞の人物像を論じた。信瑞は稀有なる学僧であり、その卓越した作文技術は高い評価を受けていたが、浄土思想については法然の思想を愚直に継承する立場を有していた。さらに信瑞は当時のいわゆる「教団」形成とは一線を画し、信空のようなヒジリ的な念仏行者であつたと考えられ、その思想が継承されることなく、信瑞の名は埋没していつたものと考えられる。

奇しくも信瑞の著作は近代に再発見され一躍脚光を浴びた。そこには現在に連なる「浄土宗教団形成」以前、法然と面授したものが次第に減り、その正統性を第二世代へと求め、その解釈の相違に溢れるなかで、そのような「教団」に属する立場から距離を置き、ひたすら法然の教えを勧進・実践する姿を見ることができるのである。

以上、本論では「敬西房信瑞の研究」と題して『浄土三部経音義集』『広疑瑞決集』を中心に、書誌学、引用文献といった基礎研究を中心に論じてきた。多角的な視点からの検討を行ったため雑駁な議論となつたことは否めないが、信瑞の新たな一面を明らかにすることができたと思われる。本論を通して信瑞著作の研究の足がかりとなれば幸いである。